

平成 29 年度
文部科学省委託調査

平成 29 年度文部科学省高等教育局委託事業
『国内大学の GPA の算定及び活用に係る
実態の把握に関する調査研究』
報告書

平成 30 年 3 月

株式会社 政策研究所

目 次

第1章 調査の目的と概要.....	1
(1) 調査の目的.....	1
(2) 調査対象と主な調査内容.....	1
(3) アンケート調査結果の概要.....	2
(4) ヒアリング調査.....	2
第2章 アンケート調査.....	5
(1) G P A制度の導入状況.....	5
(2) G P A制度を導入している理由.....	7
(3) 学部毎の算定方式の有無.....	8
(4) G P A算定対象の項目.....	9
(5) G P A算定方法.....	9
(6) G P A算定から除外している授業科目について.....	10
(7) 履修中止制度の運用について.....	11
(8) 再履修・再修得の運用について.....	12
(9) G P A活用の効果について.....	13
(10) G P A活用の有効性と活用実態について.....	15
(11) G P A活用の必要条件と導入実施状況について.....	18
(12) G P Aの公表について.....	20
(13) G P Aを導入していない理由.....	21
第3章 ヒアリング調査.....	23
(1) 調査対象と調査方法.....	23
(2) ヒアリング内容とヒアリング結果の概要.....	24
(3) 大学へのヒアリング内容.....	25

資料編

第1章 調査の目的と概要

国公立大学におけるGPAの取組状況について、アンケート調査と、一部の大学へのヒアリング調査を行い整理した。

(1) 調査の目的

現在、多くの大学では成績評価の指標として、各授業の成績をもとに算出するGPA制度を導入している。

GPA制度は、個々の学生の学修の全体的な状況を把握する上で有力なツールであると考えられるが、その算出方法や運用実態は様々であり、GPAの算出方法や活用方法について実態を把握し、その情報を広く大学に普及していく必要があると考えられる。

本調査は、こうした状況を踏まえてGPAの算出の仕方や活用実態等を把握することを目的としており、調査方法として全国の国公立大学に対してアンケート調査を実施し、その状況を整理した。

(2) 調査対象と主な調査内容

①アンケート調査

【対象大学（757校）】

国立大学 82校

公立大学 85校

私立大学 590校

【GPAの取組に関する主なアンケート調査の主な質問内容】

- 大学のプロフィール：大学名、大学種別、担当学部名、回答者連絡先
- GPA制度の導入の有無
- GPA制度の導入の理由
- GPAの算定方式
- GPA算定の対象科目
- GPA算定の前提となる成績評定方法と、その採用理由
- GPA算定から除外している科目と、その理由
- 履修中止制度の運用の有無
- GPA活用による効果
- GPA活用の有効性と活用状況
- GPA活用の必要性和導入状況
- GPAの公表状況

②ヒアリング調査

以下の大学に対し、メールや電話及び対面による直接のヒアリング調査を実施した。

北海道大学、筑波大学、お茶の水女子大学、岡山大学、青森公立大学、桜美林大学、同志社女子大学

【GPAの取組に関する主なヒアリング調査質問内容】

- GPAを導入した経緯・背景について
- GPA活用方法とその効果は何か
- GPA算定方法とその問題・課題は何か
- 学内におけるGPA制度の定着に係る工夫は何か

(3) アンケート調査結果の概要

①調査期間

平成30年1月～平成30年2月（平成29年4月1日現在の状況を確認）

②調査方法

国公立大学（大学院を除く）に対してアンケート調査の協力依頼を行い、電子媒体による調査票の送信・受信を行った。

③調査回収状況

調査対象大学数 757 大学、回収 624 校 82.4%
・国立大学 82 校：回収 82 校（回収率 100.0%）
・公立大学 85 校：回収 73 校（回収率 85.9%）
・私立大学 590 校：回収 469 校（回収率 79.5%）

(4) ヒアリング調査

①調査対象大学の概要

以下の大学に対して、ヒアリングを実施した（一部大学にはメール等で対応）。

- ・北海道大学
- ・筑波大学
- ・お茶の水女子大学
- ・岡山大学
- ・青森公立大学
- ・桜美林大学
- ・同志社女子大学

②ヒアリング概要

【GPAの導入の背景】

- ・ GPAの導入については、「一般的に広く採用されているため」、また、「国際的にも広く採用されている方法である」ことから導入しているケースが多いが、一方、学生の学修動機づけに活用していくために、厳格・厳正な成績評価を適正に反映できる制度であるという理由や、「学内の制度に適していること」など、大学独自の条件に適合しているとの理由で導入しているケースも多く見られる。

【GPAの導入の効果】

- ・ 学生自身が学修成果を把握できることで、学修意欲が向上するとともに、学生の学修状況を数値的に把握することにより、履修指導が可能となる。また、各教員間、各授業間で成績評価基準の平準化が進むなど、大学教育改革の一環として大学教育の質保証を行う上でも、有効な制度となっている。

【GPAの運用に際しての問題、課題】

- ・ GPAの導入効果を明らかにするために、学生の学修行動等とGPAとの相関関係を分析することが求められており、学生に対するアンケート調査、他大学との比較分析等を実施することで、質の保証を進めていくことが必要とされている。
- ・ GPAは、他の制度（キャップ制度、アカデミック・アドバイザー制度、早期卒業制度、履修放棄制度等）との組合せを通してその効果が期待されるものであり、今後とも適正な運用が必要とされている。
- ・ GPA制度を教育に生かすためには、科目間での成績評価にバラつきがないことが理想的であり、そのためには、難易度の偏りのない試験の実施と適正な成績評価を行うことが必要とされている。
- ・ アドバイザー制度を導入している大学は、教員への負担が大きくなっており、教職員が連携して役割分担することが必要とされている。
- ・ GPAは履修放棄の減少には好ましいが、広い分野の学問に触れる機会を失わせることにつながるのではないかという問題にも対応することが必要とされている。

【GPA制度の定着のための工夫】

- ・ GPA制度を定着させていくには、授業科目の到達目標や成績評価基準を明確化し、学生へのきめ細かな履修指導や学習支援に生かしていくことと併せて、GPAの算定方法やその効果を学生や教員へ周知徹底していくことが必要とされている。
- ・ GPAについては、依然として教員による無関心や認識不足は指摘されている。これについては、例えば、ある科目についての全履修生のGPを成績評価対象者数で割ったもの（GPC）を科目ごとに算出して教員にフィードバックし、GPAに関する情報を広く公開をすることで、教員の認識も高まっていくという指摘もある。

また、ファカルティ・デベロップメントを実施し、シラバスの改善と連動させることにより改善が期待できるとされている。

国内大学のGPAの算定及び
活用に係る実態に関する
アンケート調査

第2章 アンケート調査

(1) GPA制度の導入状況

①回答のあった大学

全大学の回答状況は82.4%であり、大学種別では国立大学では100.0%、公立大学では85.9%、私立大学では79.5%となっている。

②GPA制度の導入状況

大学におけるGPA制度の導入状況は、全体では「GPA制度を導入している」が92.2%、「GPA制度を導入していない」が4.5%、「GPA制度を導入していないが、導入に向けて検討している」が2.6%、「その他」が0.7%となっている。

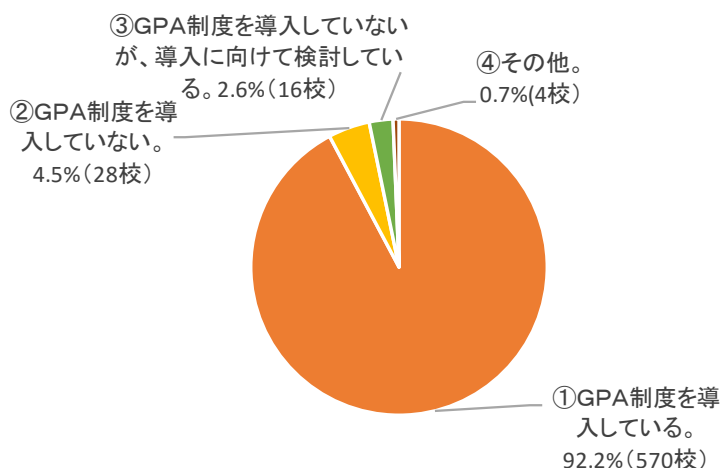
国立、公立、私立大学別にGPA制度の導入状況を見ると、回答のあった国立大学では全てが導入しており、公立大学では「GPA制度を導入している」が79.5%、「GPA制度を導入していない」が16.4%、「GPA制度を導入していないが、導入に向けて検討している」が2.7%となっている。

私立大学では、「GPA制度を導入している」が92.9%、「GPA制度を導入していない」が3.5%、「GPA制度を導入していないが、導入に向けて検討している」が3.0%となっている。

「④その他」では、平成30年度から導入予定という回答がみられた。

図表 2.1 GPA制度の導入状況 (n=618)

(無回答数は除外している)

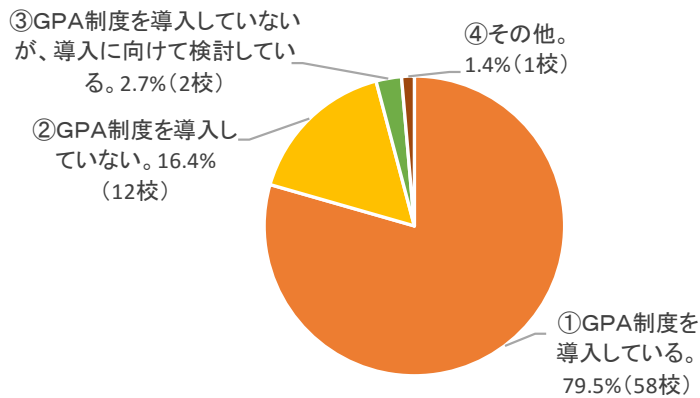


図表 2.2 GPA制度の導入状況 (n=82 (国立大学))



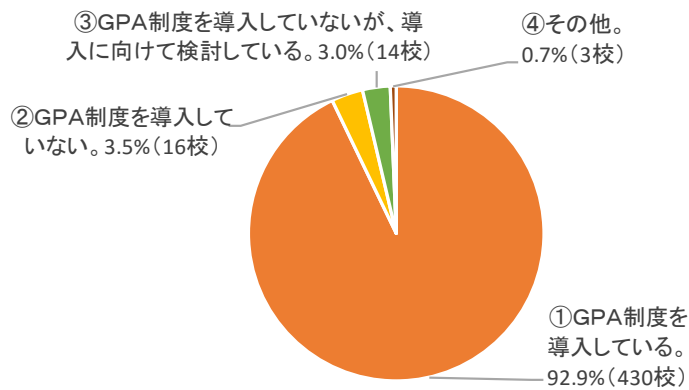
図表 2.3 GPA制度の導入状況 (n=73 (公立大学))

(無回答数は除外している)



図表 2.4 GPA制度の導入状況 (n=463 (私立大学))

(無回答数は除外している)



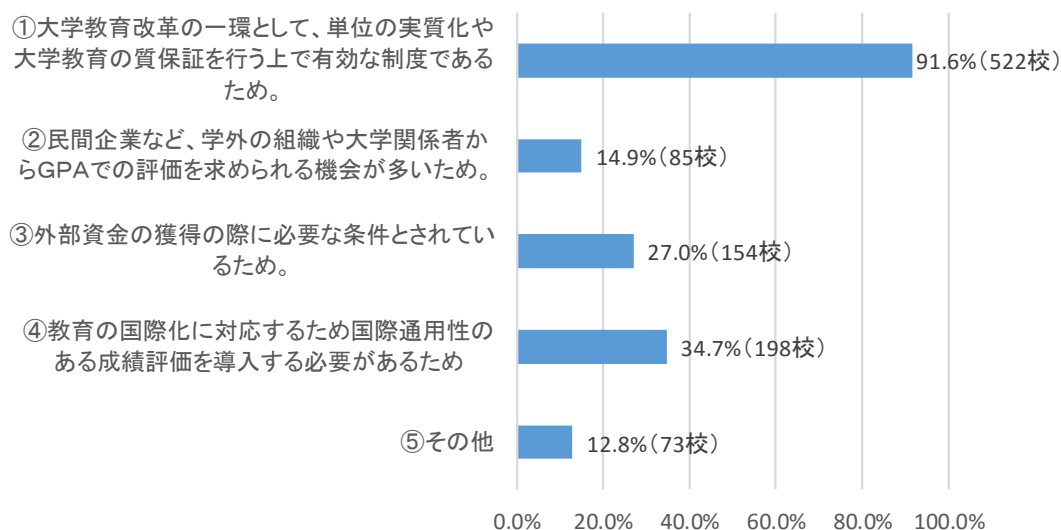
(2) GPA制度を導入している理由

【全体】

GPA制度を導入している大学についてその理由を見ると、「①大学教育改革の一環として、単位の実質化や大学教育の質保証を行う上で有効な制度であるため」が91.6%を占めており、続いて、「④教育の国際化に対応するため国際通用性のある成績評価を導入する必要があるため」が34.7%となっている。

また、「⑤その他」の導入理由では、「学生の学業奨励のため」、「学生の修学指導のため」、「奨学金の出願に活用するため」といった回答がみられた。

図表 2.5 GPA制度の導入理由 (n=570、複数回答可)

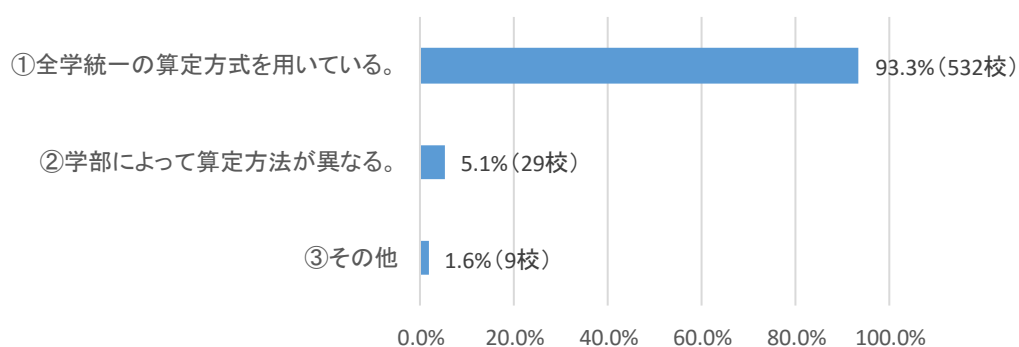


(3) 学部毎の算定方式の有無

【全体】

算定方式については、全体として「①全学統一の算定方式を用いている」という回答が93.3%を占めている。

図表 2.6 学部毎の算定方式の有無 (n=570)



「③その他」の算定方式については、「全学統一の算定方法と学部による算定方法を併用している」といった回答がみられた。

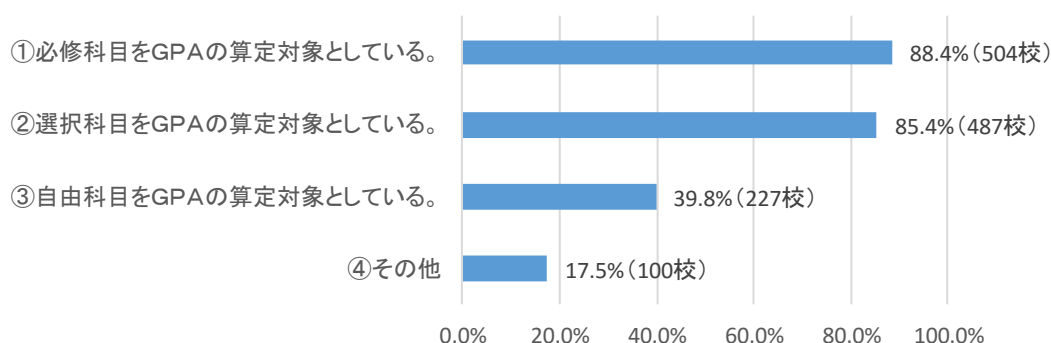
(4) GPA算定対象の項目

【全体】

GPA算定対象項目については、全体として「①必修科目をGPAの算定対象としている」という回答が88.4%、「②選択科目をGPAの算定対象としている」という回答が85.4%とほぼ同等の割合を占めており、「③自由科目をGPAの算定対象としている大学」は39.8%と少ない。

また、「④その他」として、「対象科目は個別に指定する」等の回答があった。

図表 2.7 GPA算定対象の項目 (n=570、複数回答可)



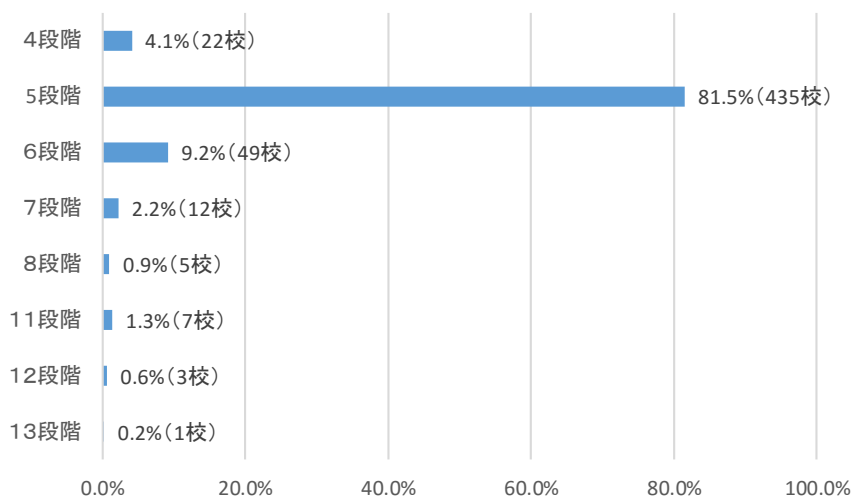
(5) GPA算定方法

大学として全学部統一の算定方法を採用しているケースが多く、段階数では、4段階から13段階まで確認されたが、5段階の成績からGPを算定するケースが多い。

また、5段階の成績に対応するGPは、「4(4.0), 3(3.0), 2(2.0), 1(1.0), 0(0.0)」の回答が多くみられた。

5段階を採用している大学の多くが「国際的に広く採用されている」「一般的に多くの大学で採用されている」ことを理由として挙げている。

図表 2.8 GPA算定方式 (段階数) (n=534 (無回答数をのぞく)、()内は学校数)



(6) GPA算定から除外している授業科目について

①対象から除外している授業科目

【全体】

GPA算定の対象から除外する科目は、全体として「④履修中止制度等を活用して履修を中断した科目はGPAの算定の対象から除外している」というケースが54.0%と多く、次いで「⑤卒業要件単位数に含まない科目はGPAの算定の対象から除外している」が46.8%、「⑥段階式の評価ではなく合格／不合格等で評価することが適当であり、GPAの算定になじまないと判断される科目はGPAの算定の対象から除外している」が41.4%となっている。

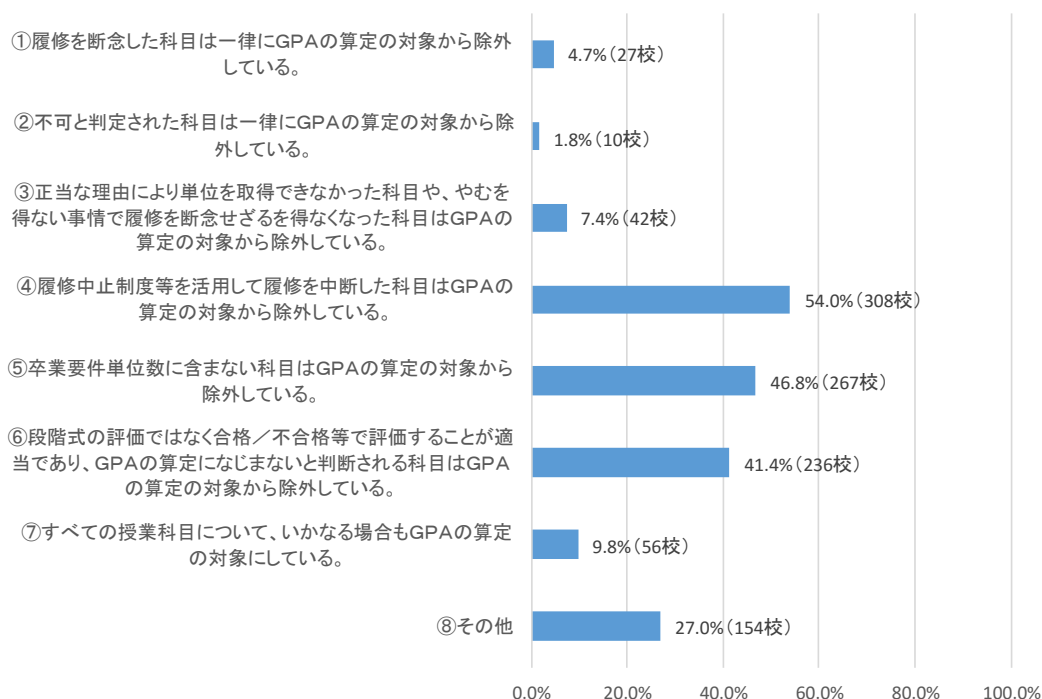
また、「⑧その他」の内訳は、他大学で認定された授業科目が多くみられた。

「①履修を断念した科目は一律にGPAの算定の対象から除外している」は4.7%、「②不可と判定された科目は一律にGPAの算定の対象から除外している」は1.8%であり、ほとんどの大学では履修を断念した科目や不可と判定された科目もGPAの算定の対象としていることが分かった。①、②に該当する大学が、GPAの算定の対象から除外している理由は、

- ・ 履修の取り下げを行った科目をGPAの算定に加えると、学生の学問的興味による自由な履修を妨げるため
 - ・ 学力レベルを測る目的でGPA制度を導入しているのであり、その科目についての最終的な学力（修得度）が測れば、それで足りるため
 - ・ 著しくGPA値が下がり、学習意欲が低下することなどを防ぐため
- 等の回答があった。

「③正当な理由により単位を取得できなかった科目や、やむを得ない事情で履修を断念せざるを得なくなった科目はGPAの算定の対象から除外している」は7.4%であるが、事故、病気、怪我などの予測不能な事態により長期欠席する場合に除外している大学が多く見られた。

図表 2.9 対象から除外している授業科目 (n=570、複数回答可)



(7) 履修中止制度の運用について

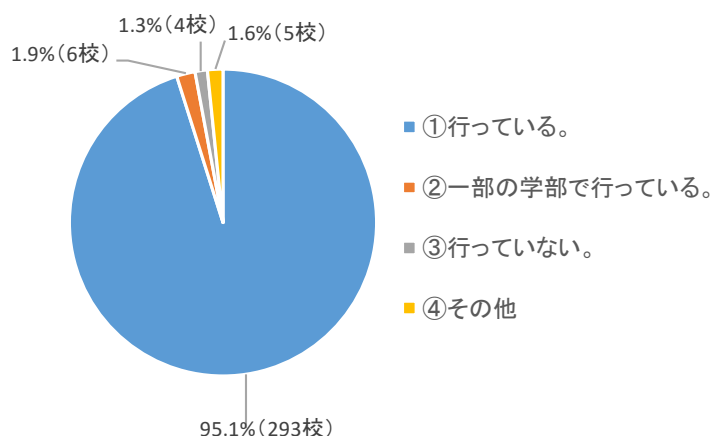
①履修中止制度の運用状況

履修中止制度等を活用して履修を中断した科目をGPAの算定の対象から除外している大学のうち、「①履修の中止の申し立て期限を設けたり特定の回数を受講後の履修中止を認めない運用を行っている大学」は一部の学部で行っている大学を含み97.0%を占めている。

また、「④その他」として「病気、ケガなどの理由により、長期間(連続する21日間以上)授業に出席できなかったときや、履修登録後に交換留学等が認められた場合など、履修を取り消すことができる」等の回答が見られた。

図表 2.10 履修中止制度の運用状況（履修の中止の申し立て期限を設けたり、特定の回数を受講後の履修中止を認めない運用を行っている大学）（全体 n=308）

*母数は履修中止制度等を活用して履修を中断した科目はGPAの算定の対象から除外している大学数

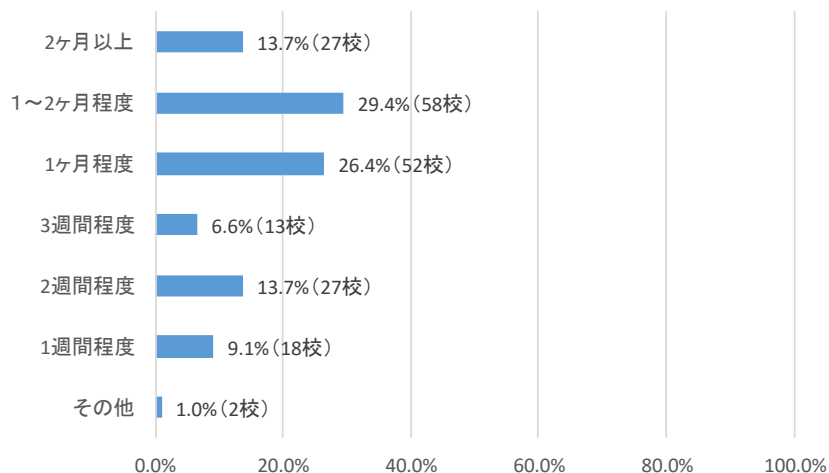


②履修中止制度を運用している場合の申立期限や受講回数の上限

履修中止の申立期限を回答した大学についてみると、授業実施後1～2ヶ月程度という回答が多くなっている。

図表 2.11 申立期限の状況 (n=197)

*母数は履修中止制度を行っているとは回答した大学数から、無回答数を除いた大学数



(8) 再履修・再修得の運用について

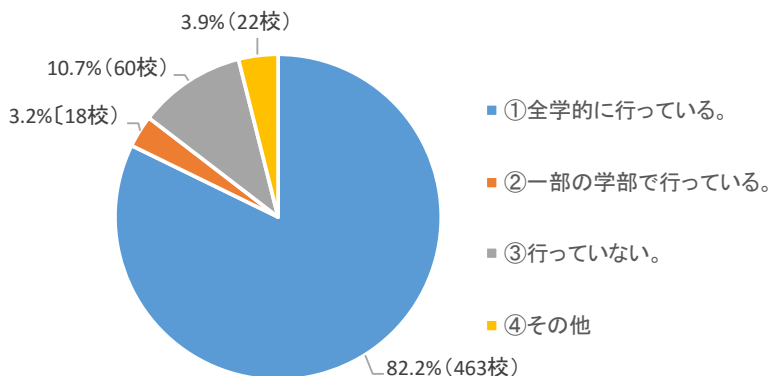
①取組状況について

【全体】

授業科目の再履修・再修得を認め、取得した成績をGPAに反映する運用の状況については、「①全学的に行っている」という回答が82.2%となっている。

図表 2.12 再履修・再修得の取組状況 (n=563)

*母数はGPAを導入している大学数から無回答数を除外した大学数



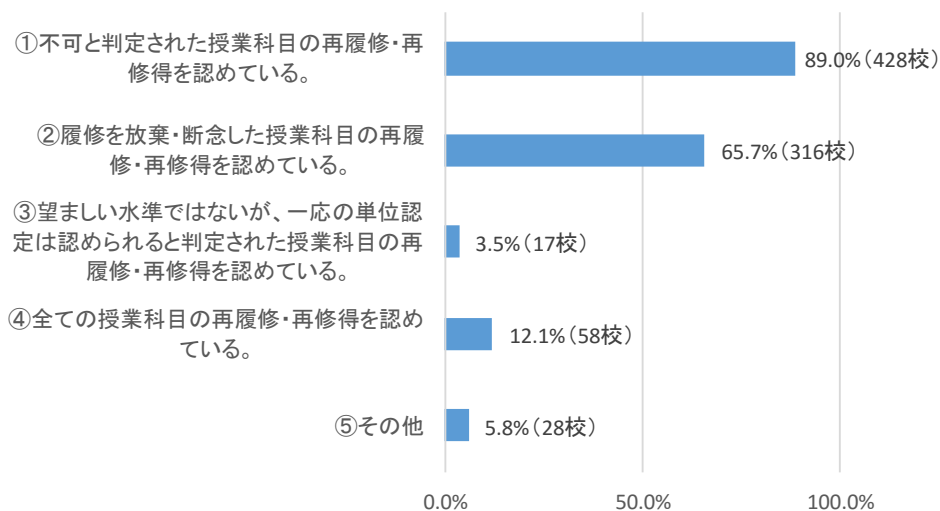
②行っている場合の授業科目の内容

【全体】

再履修・再修得が認められる授業科目は、全体として、「①不可と判定された授業科目の再履修・再修得を認めている」という回答が89.0%を占め、次いで「②履修を放棄・断念した授業科目の再履修・再修得を認めている」という回答が65.7%となっている。

図表 2.13 再履修・再修得の授業科目 (全体 n=481、複数回答可)

*母数は全学的に行っていると回答した大学及び一部の学部で行っていると回答した大学数 (無回答数は除外)



(9) GPA活用の効果について

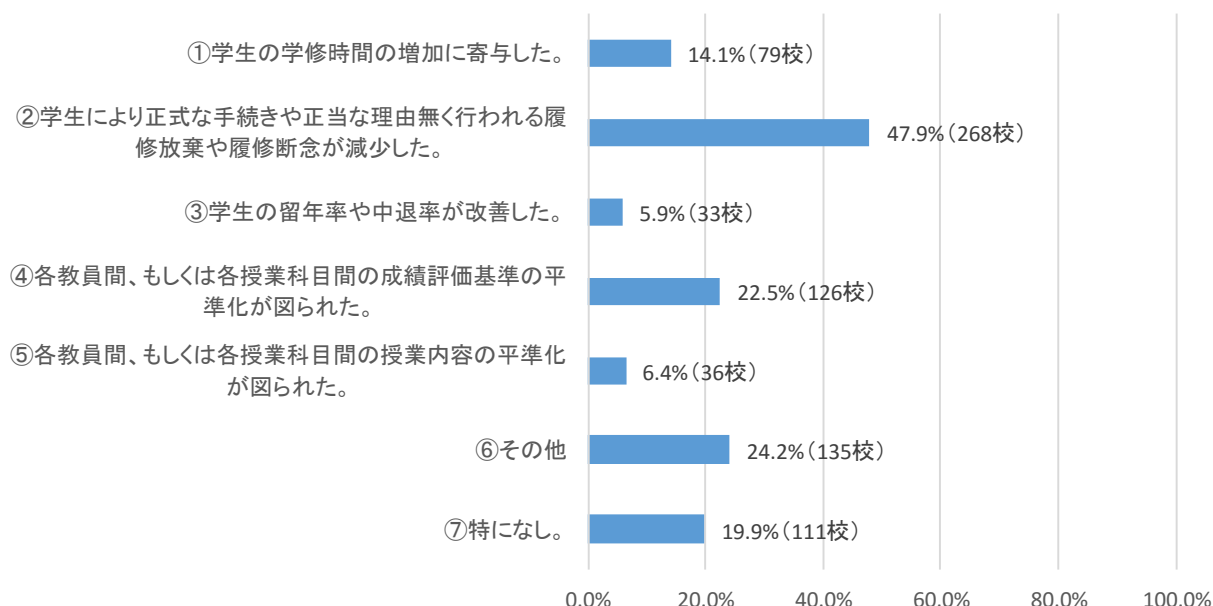
【全体】

算定したGPAを活用し、教育の質向上にどのような効果が生じているかを確認したところ、「②学生により正式な手続きや正当な理由無く行われる履修放棄や履修断念が減少した」という回答が47.9%を占めている。また、その他を除き、「④各教員間、もしくは各授業科目間の成績評価基準の平準化が図られた」が次に多くなっている。「⑦特になし」という回答も一定数見られた。

なお、その他については「学修指導効果」、「履修指導効果」、「奨学金の選定等に関する効果」といった回答が見られた。

図表 2.14 GPA活用の効果 (n=559、複数回答可)

*無回答数は除外している



図表 2.15 その他の主な内容

GPA活用の効果	効果の内容
学修指導効果	履修状況を把握し、履修指導や学修への助言を通して、学生の学習支援に活用。
	成績不振者の早期発見、早期ケアが可能となった。
	学生個々並びに全体の修学度の把握が容易となったことにより、より適切な学習指導が可能となり、学生の学修意欲の向上につながった。
	GPA及び既修得単位数による基準を設定し、当該基準を下回る学生を成績不振学生と位置づけ、修学等の指導を行う取組を実施している。
履修指導効果	アドバイザーによる履修指導、相談に活用し、成績不振学生の早期学修指導が可能になった。
	奨学金推薦の根拠にしている。
	GPAの活用は今後の課題としており、現時点では学内表彰および奨学制度の基礎資料としてのみ使用している。
奨学金の選定等に関する効果	特別奨学生推薦・教育実習判定・他県教員採用推薦等に活用されることにより、成績向上を目指す学生が増えた。
	留学時の国際適用性が増した。
	学生が単位修得だけでなく、評価内容も意識するようになった。

第2章 アンケート調査

留学に関する効果	履修状況を把握し、履修指導や学修への助言を通して、学生の学習支援に活用。
評価への理解	学生が単位修得だけでなく、評価内容も意識するようになった。

(10) GPA活用の有効性と活用実態について

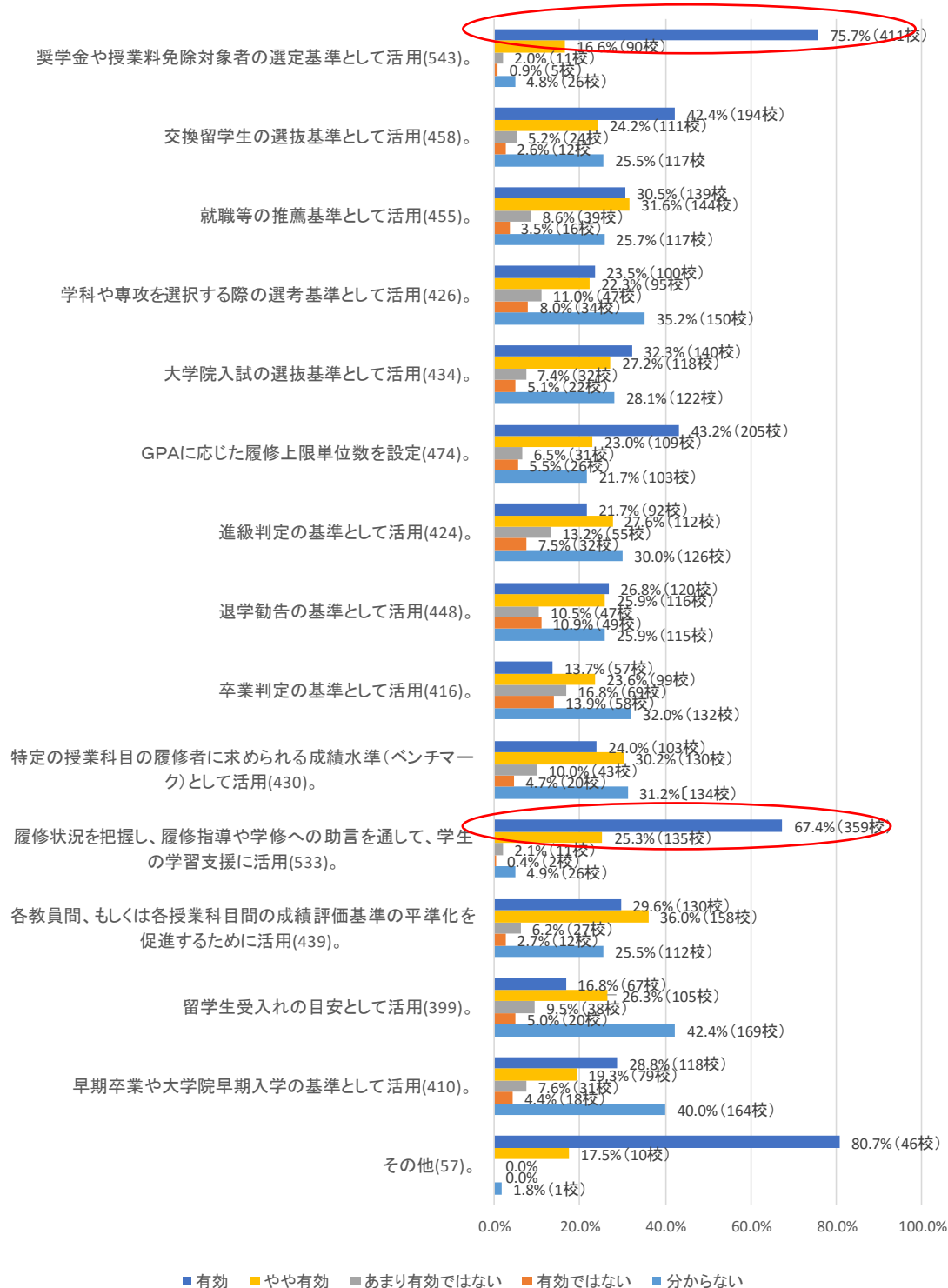
①GPA活用の有効性

【全体】

算定したGPAの有効な活用方法を確認したところ、「奨学金や授業料免除対象者の選定基準として活用」が有効とする回答が多く、次いで「履修状況を把握し、履修指導や学修への助言を通して、学生の学習支援に活用」を有効とする回答が多くなっている。

図表 2.16 GPA活用の有効状況

* () 内は回答した大学数であり、これを分母として集計。(無回答数は除外している)



第2章 アンケート調査

【その他の内容】

その他の主な内容は以下のとおりであり、学生の学修面サポート、各種の表彰制度、ゼミや研究室配属、転部や転学、その他の推薦基準等に有効と回答されている。

図表 2.17 その他の主な内容

学生の学修面サポートに有効	学業不振による面談対象者を抽出する基準として活用。
	学修不振をチェックする際の指標に活用、学修成果の把握に活用。
	学生の4年間の学びのプロセスを把握するために活用。
各種の表彰制度に有効	学生表彰制度の基準として活用。
	特待生、成績優秀者表彰候補者の選考に活用。
	学内の表彰の選抜基準として活用。
ゼミや研究室配属等に有効	卒業時にGPA値の優秀者に対し特別表彰を行う目安として活用。
	研究室配属の際の参考としている。
	ゼミナールや卒業研究の配属先決定、卒業時の学生代表者及び受賞者決定。
転部や転学、各種の推薦基準等に有効	大学院入試の特待生基準として活用。
	教育実習派遣の基準にしている。
	交換留学の派遣学生選抜の際の参考として活用。
	大学院各研究科における学内選考入試の出願資格として利用。
	国費外国人留学生選考基準の一部として活用。
	転部試験の出願上の単位修得条件。
	教職課程による教育実習実施基準。
	副専攻制度の認定条件として活用。
	派遣留学生の奨学金の選考基準として活用。
転入試験の条件として活用。	
その他	単位互換科目の出願要件、在学留学や奨学金の選考等に活用。
	定員の決まっている授業科目の選抜に利用。
	IR関連の学生成績分析、中退予防に関する指導の基準。

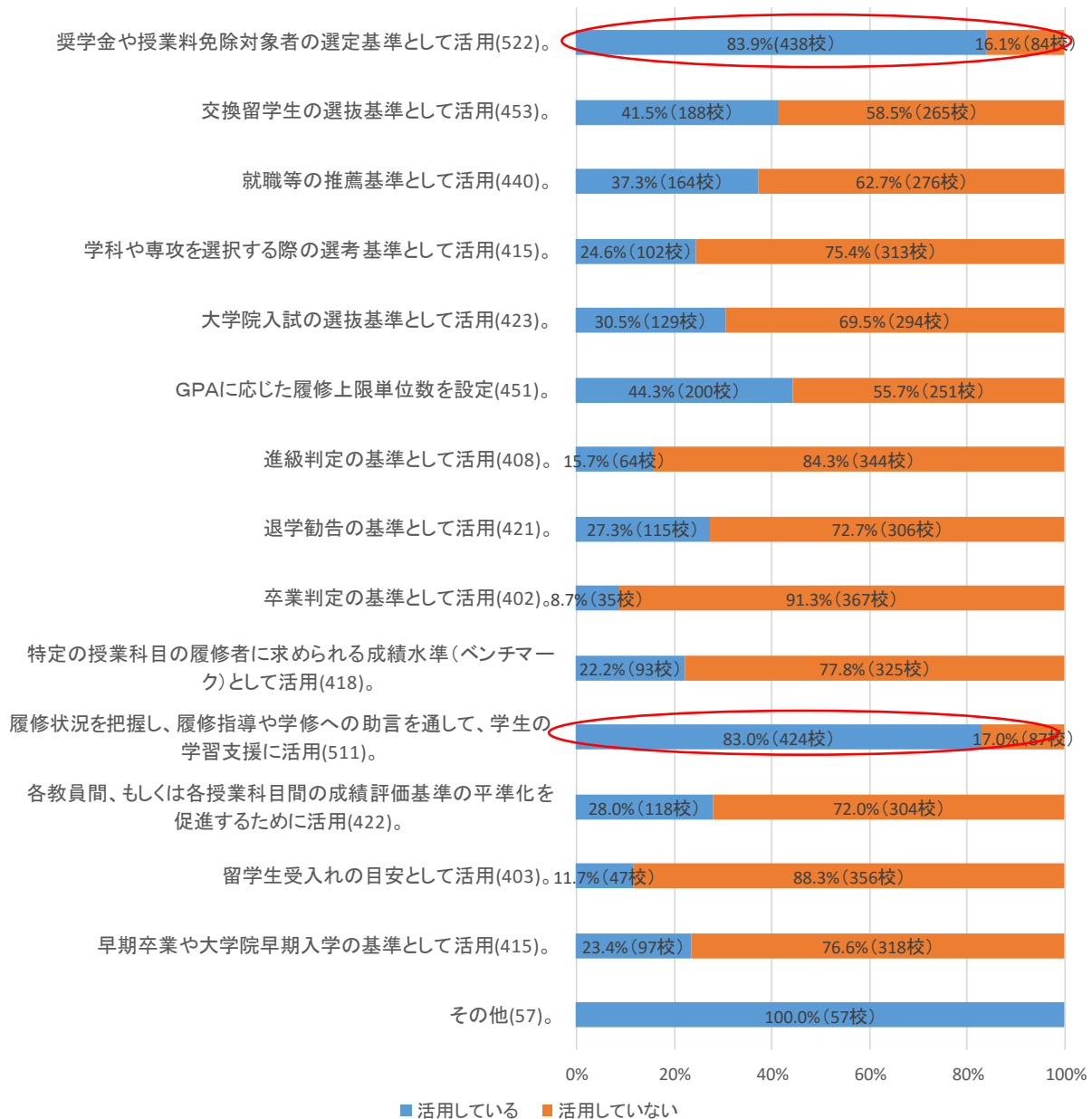
②GPAの活用実態

【全体】

GPAの活用実態としては、「奨学金や授業料免除対象者の選定基準として活用」とする回答が多く、次いで「履修状況を把握し、履修指導や学修への助言を通して、学生の学習支援に活用」とする回答が多くなっている。

図表 2.18 GPAの活用実態

* () 内は回答した大学数であり、これを分母として集計。(無回答数は除外している)



(11) GPAを活用する前提として必要な条件と導入実施状況について

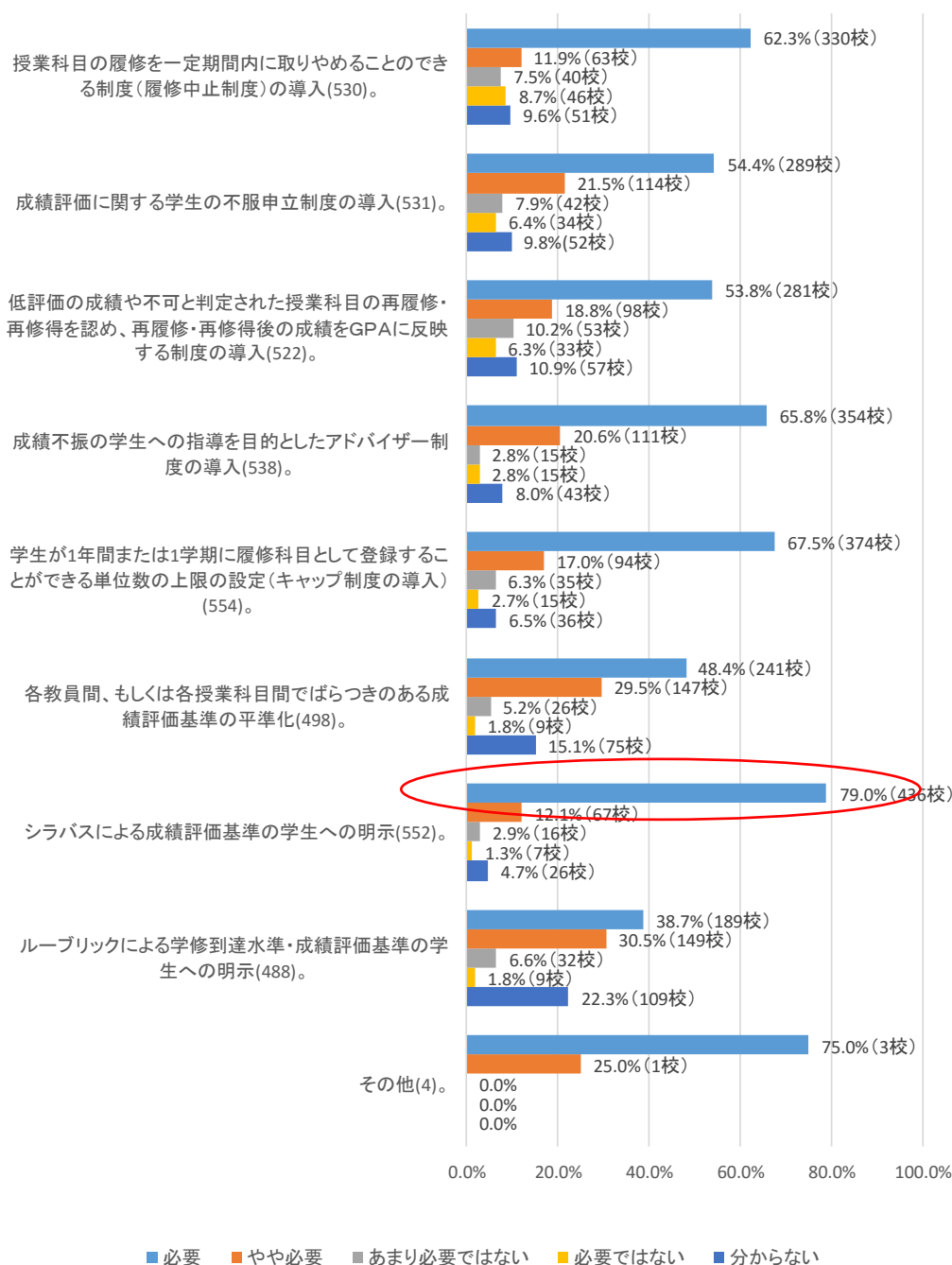
①GPA活用の前提条件

【全体】

GPAを活用する前提として必要と思われる条件を確認したところ、「シラバスによる成績評価基準の学生への明示」が最も多く、次いで「学生が1年間または1学期に履修科目として登録することができる単位数の上限の設定（キャップ制度の導入）」「成績不振の学生への指導を目的としたアドバイザー制度の導入」が多くなっている。

図表 2.19 GPA活用の必要条件

* ()内は回答した大学数であり、これを分母として集計。(無回答数は除外している)



【その他の内容】

その他の主な内容は以下のとおりであり、必要、やや必要と回答されている。

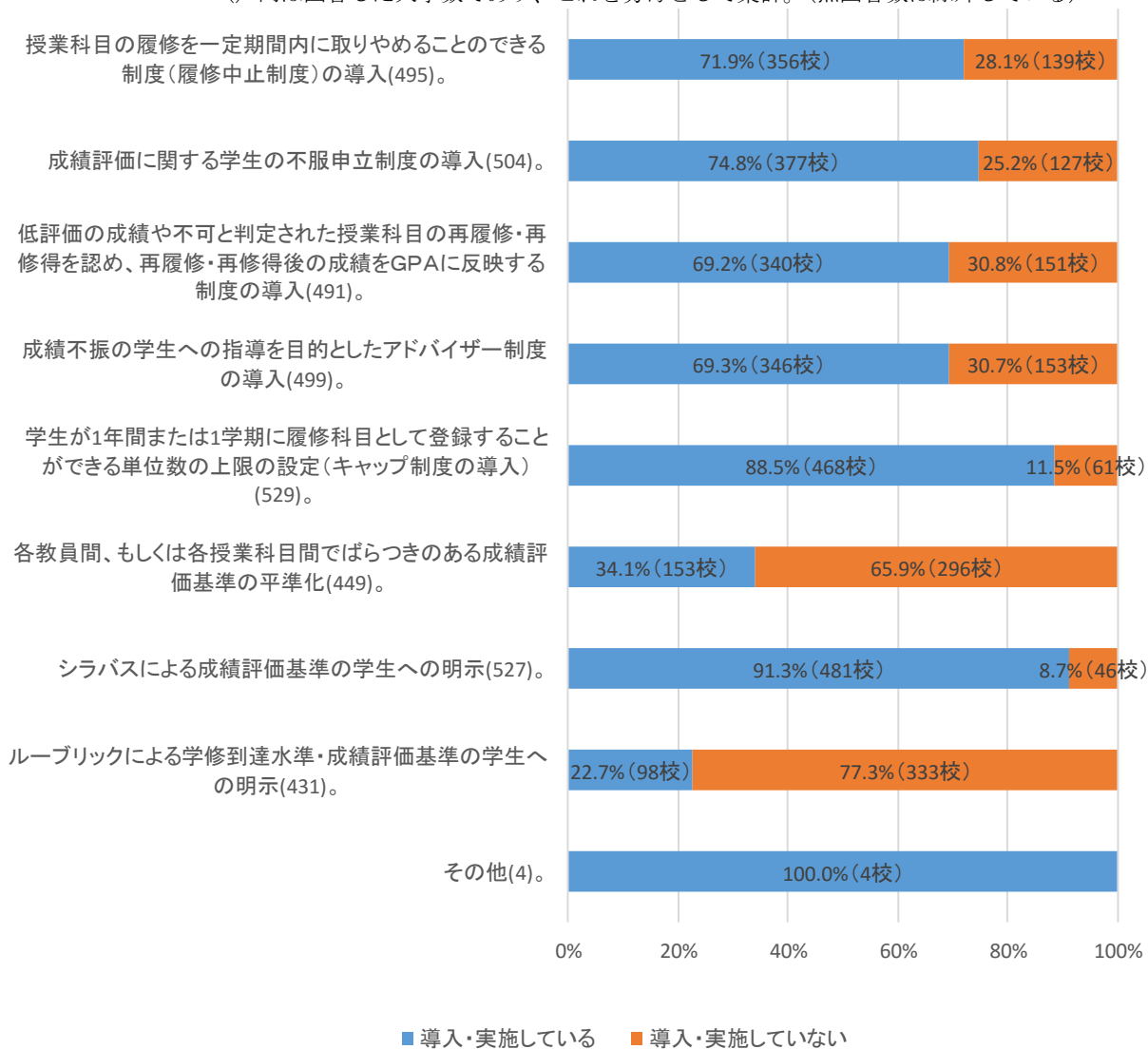
- ・ラーニング・コモンズの設置およびサポート・デスク（学修支援）の導入
- ・各科目における成績分布の学生への明示

②GPA活用の前提条件の導入・実施状況

GPA活用の前提条件の導入・実施状況については、「シラバスによる成績評価基準の学生への明示」が最も多く導入・実施されており、次いで「学生が1年間または1学期に履修科目として登録することができる単位数の上限の設定（キャップ制度の導入）」が多く導入・実施されている。

図表 2.20 GPA活用の前提条件の導入・実施状況

* () 内は回答した大学数であり、これを分母として集計。(無回答数は除外している)

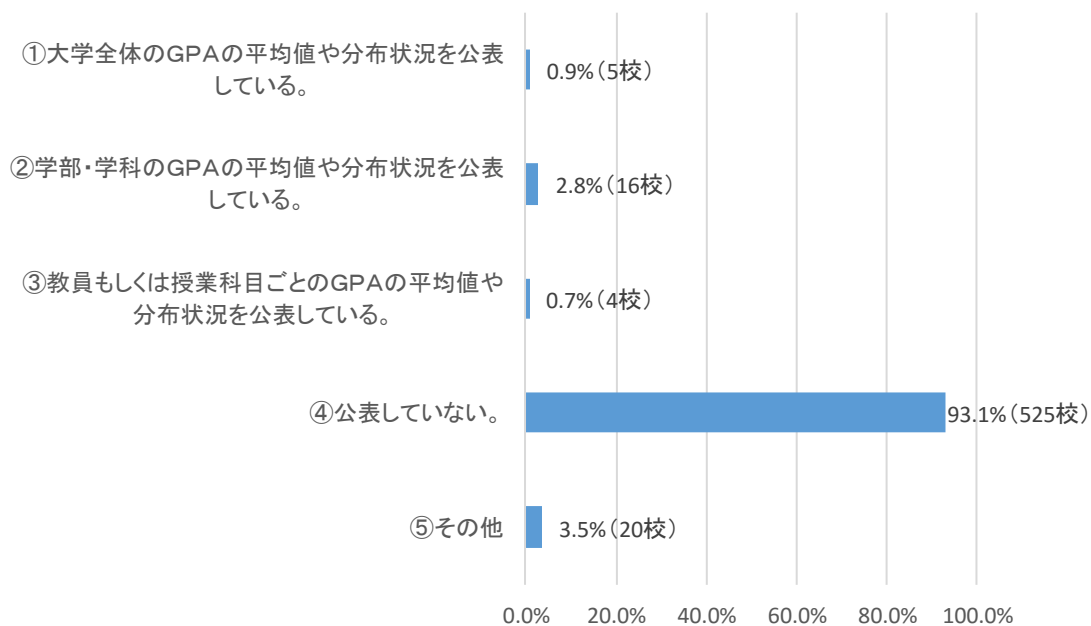


(12) GPAの公表について

GPAの公表については、全体として「公表をしていない」という回答が93.1%となっている。

図表 2.21 GPAの公表(n=564、複数回答可)

*母数はGPAの公表について回答した大学数
 ()内は回答した大学数。(無回答数は除外している)



【その他】

その他の主な内容は以下のとおりである。

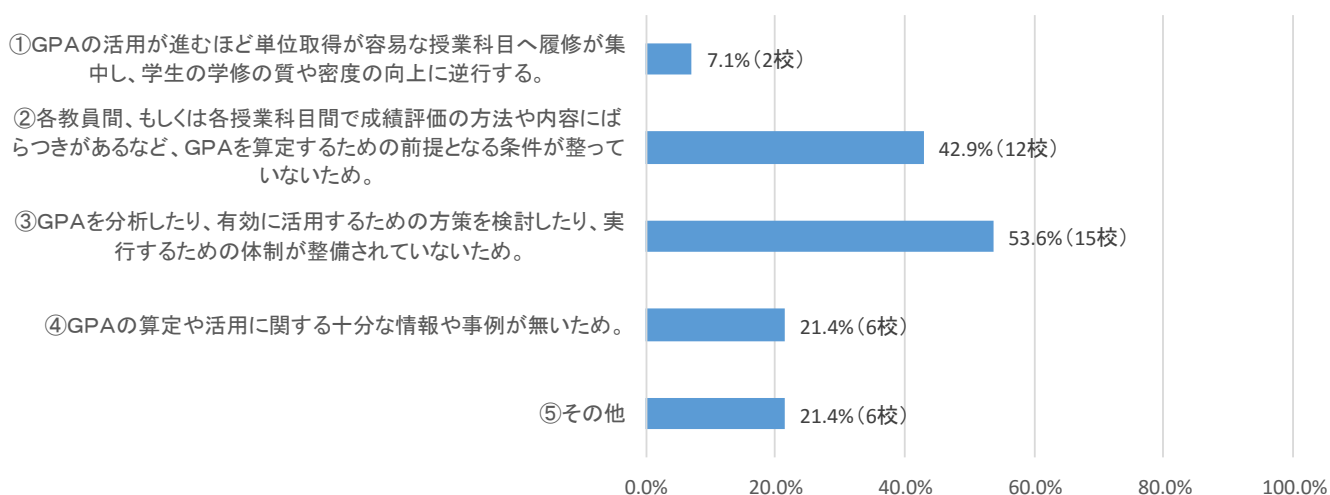
- ・成績証明書に記載している
- ・在籍者数が極めて少ない大学のため、学内専任教員のみ公表している
- ・学生本人及び保護者に公開している
- ・保護者にのみ公開している

(13) GPAを導入していない理由

【全体】

GPAを導入していない理由は、全体として「③GPAを分析したり、有効に活用するための方策を検討したり、実行するための体制が整備されていないため」という回答が多く、次いで「②各教員間、もしくは各授業科目間で成績評価の方法や内容にばらつきがあるなど、GPAを算定するための前提となる条件が整っていないため」となっている。

図表 2.22 GPAを導入していない理由 (n=28、複数回答可)



国内大学のGPAの算定及び
活用に係る実態に関する
ヒアリング調査

第3章 ヒアリング調査

(1) 調査対象と調査方法

①ヒアリング対象大学

GPAを学生の学修の質向上や大学の教学マネジメント等に活用し、実際に成果を挙げている大学に対し、ヒアリング調査を行った。

- ・北海道大学
- ・筑波大学
- ・お茶の水女子大学
- ・岡山大学
- ・青森公立大学
- ・桜美林大学
- ・同志社女子大学

②ヒアリング方法

原則として直接対面してヒアリングを行っているが、一部の大学については電話やメール等により内容を把握している。

(2) ヒアリング内容とヒアリング結果の概要

①主なヒアリング内容

調査対象大学へのヒアリング内容は以下のとおりである。

図表 3.1 主なヒアリング内容

項目	内容
GPAを導入した経緯・背景	<ul style="list-style-type: none">・どのような必要性があったのか。・導入に当たって反対意見はあったか。
GPA活用方法とその効果	<ul style="list-style-type: none">・これまでの学修面、教学面での活用（運用）内容とその具体的な効果。・学生の学力、学修活動等とGPAとの値の相関性などの分析はしているか。・キャップ制とGPAの組合せなどの仕組みづくり。・アドバイザー制度は実施しているか。
GPA算定方法とその問題点や課題	<ul style="list-style-type: none">・GPA算定対象の科目についての考え、その理由は何か。・不合格になった科目や履修を断念した科目は、GPA算定の対象にしているか。・GPA算定について、学生からの異議申し立てはあるか。・初年度の学生に対して、GPAに関してどのような説明をしているか。・GPAの算定全体に対して、どのような問題があるか。
学内におけるGPA制度定着の工夫	<ul style="list-style-type: none">・早期卒業制度とGPA制度の組合せ。・GPAの定着、普及のための取組は何か。・大学としての今後の取組予定はあるか。

(3) 大学へのヒアリング内容

①北海道大学

【GPAを導入した経緯・背景】

北海道大学では、2005年度から教育の国際化への対応のために導入した。

その後、本学GPA制度の国際通用性を高めるとともに、学修成果を成績によりの確に反映させ、教育効果をあげることを目的として、成績グレードの表記及び基準を海外大学と合わせた「新GPA制度」を創設し、2015年度の入学者から導入した。

GPA制度改善の主な点は以下のとおりである。

- ・ 国際通用性を高めるため、「成績のグレード」を海外大学と同じ「A・B・C・D・F」にする。
- ・ 教育の国際化への対応と、きめ細やかな成績評価を実現するため、5段階評価を11段階評価に変更する（なお、11段階評価を基本とするが、科目の特性によっては、特定の「成績のグレード」のみを用いた6段階等での評価を可能とする。）
- ・ 付与するGP値を国際的な基準に合わせる（旧「可（ぎりぎり合格）」のレベルを2.0に、最上位のGP値を4.3に引き上げ）。
- ・ 成績評価は、「学修成果の質」に基づいて「成績のグレード」を判断し、対応するGPを付与する。
- ・ 厳格な成績評価とするため、最終的に履修を放棄した学生（履修取消を行った学生を除く）と、最後まで学修を継続した結果、試験の成績が悪かった学生について、GP値を区別する。
- ・ 不合格の評価を受けた科目を再履修し、その結果成績のグレード（GP）が上昇した場合は当初の評価を「上書き」し、再履修科目にかかるGPのみGPAに参入する。

【GPA活用方法とその効果】

GPAの活用方法及びその効果としては、以下のような点が挙げられる。

○活用方法

北海道大学では、GPA制度の活用方法について、履修登録単位数の上限設定を全学部に導入している（なお、国家試験の受験を前提とする学部は導入しないこともできるようにしている）。

また、アドバイザーという名称ではないが、第1年次に入学した学生に対して、クラス担任制度を設けて修学指導を行っており、成績不良者（例：前学期までの通算GPAが2.0未満の学生）に対して、各学部等で特別の修学指導を実施している。

退学者の予測は行っておらず、学部ごとの修業年限内での卒業率（4年あるいは6年で卒業できた学生の比率）は毎年算出しているが、GPAとの関連は調べていない。

北海道大学では、以下のような点についてもGPAが有効であるとして活用している。

- ・ 奨学金や授業料免除対象者の選定基準
- ・ 交換留学生の選抜基準
- ・ 学科や専攻を選択する際の選考基準

- ・ 大学院入試の選抜基準
- ・ 各教員間、もしくは各授業科目間の成績評価基準の平準化を促進
- ・ 留学生受入れの目安

○効果

GPA制度活用により期待される効果として、以下の点が挙げられている。

- ・ 学生自身で学修成果を把握できることによって、学修意欲が向上
- ・ 学生の学修状況を数値的に把握することにより、履修指導が可能
- ・ GPA制度を導入することによる留学の促進
- ・ 社会に対し学生の学修成果の質を保証するために、卒業要件にGPA値を活用

【GPA算定方法とその問題・課題】

厳格な成績評価とするために、最終的に履修を放棄した学生（履修取消を行った学生を除く）と、最後まで学修を継続した結果、試験の成績が悪かった学生について、GP値を区別する。

不合格の評価を受けた科目を再履修し、その結果、成績が向上した場合は、当初の評価を「上書き」し、再履修科目にかかるGPのみGPAに算入する。

GPの規定方法は、11段階を用いており、レターグレード（A⁺、A、A⁻、B⁺、B、B⁻、C⁺、C、D、D⁻、F）を設定している。

GPAの算定式は以下のとおりである。

・ 学期 GPA = (その学期に評価を受けた科目で得た GP × その科目の単位数) の合計 / その学期に評価を受けた科目の単位数の合計

・ 通算 GPA = ((各学期に評価を受けた科目で得た GP × その科目の単位数) の合計) の総和 / (各学期に評価を受けた科目の単位数の合計) の総和

図表 3.2 GPの評価方法

評語	GP	学修成果の質	素点の目安
A ⁺	4.3	授業科目の到達目標のすべての面で秀逸な学修成果をあげた。	95—100
A	4.0	授業科目の到達目標のすべての面で優秀な学修成果をあげた。	90—94
A ⁻	3.7	授業科目の到達目標のほとんどの面で優秀な学修成果をあげたが、一部において良好な結果にとどまった。	85—89
B ⁺	3.3	授業科目の到達目標のすべての面で良好な学修成果をあげた。	80—84
B	3.0	授業科目の到達目標のほとんどの面で良好な学修成果をあげたが、一部において良好とまではいえない結果にとどまった。	75—79
B ⁻	2.7	授業科目の到達目標のいくつかの面で良好な学修成果をあげたが、全体として良好とまではいえない結果にとどまった。	70—74
C ⁺	2.3	授業科目の到達目標のほとんどの面で合格となる最低限の学修成果であったが、良好な面がいくつかあった。	65—69
C	2.0	授業科目の到達目標のすべての面で合格となる最低限の学修成果であった。	60—64
D	1.0	授業科目の到達目標全体として合格となる最低限の学修成果より少し低い結果であった。	50—59
D ⁻	0.7	授業科目の到達目標のほとんどまたはすべての面で合格となる最低限の学修成果はなかった。	0—49
F	0	学修成果を示す証拠はなかった。 例) 試験の未受験、授業出席回数不足	評価無

【学内におけるG P A制度の定着に係る工夫】

北海道大学では、初年度の学生に対して、新入生ガイダンスや学生便覧等でG P A制度を説明しており、履修上限設定等の内容についても説明している。

また、一部の学部ではG P A制度を活用した早期卒業制度を導入している。

②筑波大学

【GPAを導入した経緯・背景】

筑波大学では、国際通用性のある成績評価を目指して、2012年に「筑波大学GPA制度に係わる実施要項」を定め、翌年2013年度入学生からGPA制度を導入している。

またこの要項の中で、GPA制度に係わる実施要項の目的として、学生の学習意欲を高めるとともに、筑波スタンダード¹⁾が掲げる教育の質の保証について一層の具体化を進め、適切な修学指導に資することとした。

GPA制度導入に当たっては、教育企画室²⁾や教育会議で検討を行った。GPA制度が、学生が成績の状況を把握する指標になることや、履修ペースが適正かどうかを判断しながら履修計画を策定する手助けとなること、それを大学が修学支援・指導に役立てられることなどが議論された。

GPAの対象科目は、卒業要件に係わる科目としており、2013年度学士課程入学者から、成績証明書等にGPAが表示されている。

【GPA活用方法とその効果】

GPAの活用及びその効果としては、以下のような点が挙げられる。

○活用方法

GPAの活用方法については、GPA計算の対象科目や成績評価分布の目標値が全学で一律ではないこと、また、GPAは成績評価が厳格な科目を多く履修するほど値が下がる側面もあり、GPAにとらわれ過ぎると挑戦的な履修を阻害してしまうことなどから、奨学金の受給基準などの全学横断的な評価としての利用は行っていない。各教育組織内の活用については、それぞれの判断に任せられている。

具体的な活用方法は以下のとおり。

- ・学生の学習支援の一助
- ・留学先への成績証明の一部としての提示
- ・主専攻を決定する際の選考基準（一部で活用）
- ・早期卒業の基準の一部（一部で活用）
- ・大学院への推薦基準（一部で活用）
- ・キャップ緩和の基準（一部で活用）

○効果

学生は成績の状況を具体的に知ること、現在の履修のペースが適正かどうかを考えながら履修計画をたてられるようになっており、正式な手続きや正当な理由なく行われる履修放棄が減少している。

教員としても、到達水準を測る目安として個々の学生の学修支援に活用しており、履修指導や学修への助言に有効な手段となっている。

筑波大学では、GPA制度の導入とともに、教育組織や共通科目の種類ごとに成績評価分布の目標を公表し、成績評価の厳格化を進めている。

¹⁾ 筑波スタンダード：建学の理念を踏まえて、教育の目標とその達成方法及び教育内容の改善の方策を含む教育の枠組みを明らかにし、学位プログラム化を目指した筑波大学の教育宣言として広く社会に公表するもの。

²⁾ 教育企画室：2011年から教育イニシアティブ機構の下に置かれた、教育の基本方針の企画立案、教育改革等に関する企画立案並びに教育の質の保証に係る企画立案をする組織

また、履修している科目が概ね同じか成績評価の分布が類似している集団内であれば、GPAによる比較も可能であるとし、個々の教育組織内でのGPA利用を進めている。

【GPA算定方法とその問題・課題】

GPAは、学期ごとの学期GPAと、在学中全期間の累積GPAの2種類としており、計算式は一般的に用いられている修得単位数にGPを乗じた和を総登録単位数で除した方法である。

GPの評価基準は以下に示すように、5段階評価で、配点はA+ (4.3)、A(4)、B(3)、C(2)、D(0)を採用している。

なお、教育組織ごとに部局細則でGPAへの算入を除外する科目を定めている。

また、GPA制度には適正な成績評価分布を実現していることが不可欠であるが、分野や科目の特性等から全学で一律の分布目標は定めず、教育組織や共通科目ごとに、成績評価分布の目標を定めている（主な目標値は以下参照）。

(参考) 社会・国際学群の社会学類と国際総合学類を例にした成績評価分布の目標

- 社会学類
 - ・A+とAの割合をおおむね30%以下とする。
 - ・A+の割合はAの割合以下とする。
 - ・A+とAの合計の割合は、Bの割合以下とする。
 - ・Cの割合はBの割合以下とする。
- 国際総合学類
 - ・A+とAの合計割合をおおむね40%以下とする。
 - ・A+の割合はAの割合以下とする。

筑波大学では、GPAは学生の成績評価の指標の一つと考えており、より客観的な評価指標となるよう、教育企画室では算定方法や評価基準の見直しは常に必要であると考えている。実際に、導入から3年が経過した2016年に他大学や米国指標の評価点と比較検討し、GPの評価点A+を4.3に一部変更した。

*4.3とした根拠は、国際通用性のある成績評価という観点から、米国の最近の平均値に近づくように調整した。カナダ・英国等では最高点を4.3とする場合が多くなっている。

現在のGPAの算定式は、以下のとおりである。

$$GPA = ((A+) \text{の単位数} \times 4.3 + A \text{の単位数} \times 4 + B \text{の単位数} \times 3 + C \text{の単位数} \times 2 + D \text{の単位数} \times 0) / GPA \text{対象科目の総履修登録単位数}$$

図表 3.3 GP の評価方法

評価	GP	評価基準	百点満点での目安
A+	4.3	到達目標を達成し、きわめて優秀な成績をおさめている	90 点以上
A	4	到達目標を達成し、優秀な成績をおさめている	80～89 点
B	3	到達目標を達成している	70～79 点
C	2	到達目標を最低限達成している	60～69 点
D	0	到達目標を達成していない	60 点未満
P	対象外	定められた学修水準に到達している	—
F	対象外	定められた学修水準に到達していない	—

履修申請期間（授業開始から約 2 週間）内の科目登録削除は認めており、その場合は GPA に影響しない。不合格になった科目を再履修して合格した場合でも、過去の不合格の成績はそのまま GPA に算入される。

【学内における GPA 制度の定着に係る工夫】

筑波大学では、GPA 制度を導入していることを入学時のガイダンスや履修要覧、大学の HP 等で学生に周知している。また、全学生が教育情報システム（WEB）の成績確認画面で学期毎の GPA の変化を確認でき、学生はそれによって履修計画やその他に生かせるようになっており、また、その状況を指導教員等も確認できるようになっている。

③お茶の水女子大学

【GPAを導入した経緯・背景】

お茶の水女子大学では、学生の成績評価について、旧来の伝統的な方法を採用していたが2009年頃に広がった履修状況の見直しや、学生の成績評価方法の見直しの動きの中で、学生の主体的な学びを促すため、学修成果を厳格・厳正に評価し、それを的確にあらわせるよう、従来のやり方を変更しようとする機運が生じ、GPA制度の導入を一気に進めることができた。

学生の成績を厳格・厳正に評価するために「functional³⁾GPA」を導入しているが、GPAの算定方法やその効果を、教員に対してきめ細かく説明することで、反対意見はほとんどなく、導入に理解してもらえている。

GPAの対象科目は既修得等による単位認定科目以外の全科目である。

【GPA活用方法とその効果】

GPAの活用及びその効果としては、以下のような点が挙げられている。

○活用方法

お茶の水女子大学では、GPAの対象科目は上述のとおりである。対象科目と対象外科目を細かく分類する大学もあるが、できるだけ分かりやすい運用という点も重視し全ての科目を対象とした。

成績評価は、絶対的相対評価（教員が評価実務で行っている絶対評価で評価し、その結果を組織的に規定された成績評価基準に相対変換するという考え）を採用している。すなわち、まず採点する教員に各自の素点範囲および合格点に基づき採点してもらい、それを100点満点、60点未満不合格という組織的に規定したスコアに変換し、そのスコア(S)を、 $GP = S - 55 / 10$ （ただし、 $GP < 0.5$ のとき、 $GP = 0.0$ ）でグレード・ポイントに変換してGPAを算定している。教員は各自の自由な得点配分、合格基準で採点できる仕組みになっており、functionalGPAは各科目の評価について実態に即した採点で評価することができる。そのためGPA制度の導入は教員に歓迎された。

アドバイザー制度は導入しているが、学内の調査により、学生が学修に関して最も相談しているのは友人で、次いで大学院生や上級生等の先輩、教員は三番手、次に事務となっていることが判明した。そのため、学修に関する相談室には、大学院生を配置している。

単位実質化の方策としてはキャップ制に依らず、その趣旨を学生に説明し、WEBを通じた単位の取得状況と単位実質化のためのガイドラインを可視的に確認できる仕組みを使うなどして、学生が理解するように促している。その効果測定は経時的に行い効果のほどを確認している。

ナンバリングには判別しづらい番号や記号ではなく、7色のカラーコードを添えて履修ガイド、シラバス、成績通知に示している。

お茶の水女子大学では以下のような点についてもGPA制度が有効であるとみて活用している。

³⁾ functionalGPAでは、100点満点、60点未満不合格に標準化した素点から直接グレードポイントを算出する方法である。一般に用いられているGPA指標は、原成績の細かな差異が丸められて消えてしまう。そうした不都合が起きないように、原成績を線形に変換して直接グレードポイントを算定する方法がfunctionalGPAである。functionalGPAの採用によって、教員が評価した成績が丸められることなくGPAに反映される。

- ・奨学金や授業料免除対象者の選定基準
- ・成績不振の状況のチェックやモニター
- ・交換留学生等の選抜基準
- ・各教員間、もしくは各授業科目間の成績評価基準の平準化
- ・授業外学修時間等、種々の学修指標との関係性を捉えることによる学修成果分析
- ・授業アンケート結果との関係性分析による授業実施の効果分析

○効果

GPAの活用及びその効果としては、以下のような点が挙げられている。

学生の成績データを、授業アンケートや学修行動比較調査（学生の授業に対する満足度や成長度合い等を対象にしており、生活調査とは異なる。また、他大学との比較を前提とする）等と組み合わせて、GPAの値との関連性について分析を行った結果、明らかにGPAの値と学生の授業に対する満足度や成長度合い等との相関性がみられている。

また、こうした効果分析は他大学（現在12大学）との比較も可能にしており、効果分析として有意な結果が生まれている。こうしたことができるようになったのは、IR（インスティテューショナル・リサーチ）の考え方が導入されたことが大きい。

一般に履修科目が多いと成績が低下するという声があるが、学内の調査からは、成績が低下する場合と向上する場合の両方がみられており、一概には言い切れないようである。こうした点を検証する場合でもGPAが有効となる。

教科のナンバリングに関連しては、学内の調査から、教養科目と専門科目について成績評価のつけ方を比較すると、専門科目になると成績のつけ方がそれほど厳格ではなくなっている傾向がみられる。教員自身が厳しく成績評価を行っているつもりでも、実態がみえていないこともあるため、フィードバックが必要である。これらのデータはFDを通じて公開しており、これらを見て教員が成績のつけ方を再考することが期待される。

企業へのアンケート調査からは、各企業でGPAに対する関心が高まっていることが分かっている。有力な人材を確保しようとする企業では、GPAの値を有効な選定材料の一つとして考えているようである。

【GPA算定方法】

GPの算定方法は前掲の活用方法を参照。

図表 3.4 GPと原成績素点・レターグレード・評価基準の対応関係

百点満点の原成績	GP	レターグレード	評価基準
100～90	4.5～3.5	S	基本的な目標を十分に達成し、きわめて優秀な成果をおさめている
90未満～80	3.5未満～2.5	A	基本的な目標を十分に達成している
80未満～70	2.5未満～1.5	B	基本的な目標を達成している
70未満～60	1.5未満～0.5	C	基本的な目標を最低限度達成している
60未満～0	0.0	D	基本的な目標を達成していないので再履修が必要である

【学内におけるGPA制度の補完と工夫】

履修計画や成績評価は、学生に対してガイダンスで説明を行っており、その後は、学生は学内のサイトによって把握している。

お茶の水女子大学では大学院全課程でもGPA指標で成績を出し、活用している。今後はこの学修成果の量化指標とともにそれを補完して大学・大学院での学修成果を質的に表現していく手立ての充実が課題になっている。その代表格として、学修ポートフォリオを、授業に直接関わる学修（ラーニング）だけでなく、授業外に学生各人が自らの興味関心で学んでいる広範な学習・研究（スタディ）をバランスよく表現し、人材成長の特性が質、量の両側面から分かり、また表現、発信していけるような仕組みの確立を目指したいと考えている。

④岡山大学

【GPAを導入した経緯・背景】

岡山大学では、2008年以降に入学した学生からGPA制度を適用しており、2014年度より、算定方法を前述のfunctionalGPAへ変更している。

導入当初は、これまで素点で評価されていることに対して、なぜ新たにGPAを導入するのか必要性を疑問視する意見もあり理解が進まなかったが、学生の留学の際に受入れ先の大学からGPA評価を求められることも多く、また、他大学でのGPAの導入も進んできたことから導入することとした。導入に当たっては、他大学の取り組みを調査し、岡山大学の学部、研究科におけるGPA制度を利用した成績評価とその問題点等の検討を行い活用している。

この検討の際に俎上に上がったのが、岡山大学では教員による成績評価の登録が、評点（0-100点の素点）で行われており、素点を一旦GPに置き換えたのち計算して得られるGPAは、素点そのものを取得単位数で加重平均した成績評価の「平均」を正確には反映していないというものであった。即ち、素点による順位と、素点を評語評価に置き換えて得られたGPAによる順位を比べた場合、二つの順位は、特に中位の成績者で著しく異なるという問題であり、その解決のために採用したのがfunctionalGPAであった。このfunctionalGPAは、GPAのもとになるGPを、評語から変換するのではなく、評点（素点）を一次関数的に反映する形で、0.5ポイント間隔の段階評価とするものであり、この算定方式により、原成績平均に基づく順位とGPAに基づく順位の間に見られた逆転現象はなくなり、両指標の順位関係は一致するようになった。

このfunctionalGPAへの変更により、学生の成績をきめ細かく評価できるようになったことが、学部、研究科の理解を得るきっかけともなり、学部、研究科全体で前向きに取り組むこととし現在に至っている。

GPA制度については、上記以外にも、民間企業などの学外組織からGPA評価を求められる機会も増え、外部資金の獲得の際の必要条件とされていたことも導入の背景にはある。

GPA制度導入の目的としては、他にも、「成績不振の学生をいち早く発見し、アカデミック・アドバイザー等の教員を中心に、適切な指導を行うこと」「GPAを目安にして、学生に履修登録科目数の自主規制を促し、計画的な履修を促すこと」「学生に対して、修得単位数だけではなく、個々の単位のレベルアップを図るよう喚起すること」等を挙げている。

【GPA活用方法とその効果】

GPAの活用及びその効果としては、以下のような点が挙げられる。

○活用方法

岡山大学では、GPAについて海外留学奨学金受給者・成績優秀者・研究室配属等の選考に活用されている。

また、以下のような点についてもGPAが有効であるとして活用している。

- ・奨学金や授業料免除対象者の選定基準
- ・交換留学生の選抜基準
- ・学科や専攻を選択する際の選考基準
- ・大学院入試の選抜基準
- ・履修状況を把握し、履修指導や学修への助言を通して、学生の学修支援

○効果

GPAの効果としては、以下のような点が挙げられている。

functional GPAを採用しているため、各科目の成績（評点）をきめ細かく反映し、学生の成績評価の厳格化が可能となっている。

GPAを活用した成績評価は、学内において可視化が図られ、学生への学修アンケート調査からもGPAに対する評価は高い。

岡山大学では、学生が取得した3基幹力⁴⁾（教養力、語学力、専門力）を、3側面（異分野、異社会、異文化）の経験により、グローバルな現場で実践させる教育を推進しているが、GPAの導入は、大学教育改革の一環として、単位の実質化や大学教育の質保証を行う上でも有効と考えている。

学生にとっても、自身の学部における順位や位置づけを確認できることで、今後の進路を検討する上で役立っている。また、正式な手続きや、正当な理由無く行われる履修放棄や履修断念も減少している。

各教員もルーブリックの導入で成績評価を見直し、全学的なバランスを考慮しつつ厳格に対応するようになり、各授業科目間の成績評価基準の平準化も図られるようになっていく。

【GPA算定方法とその問題・課題】

教育内容の可視化、成果の普及を進めているが、教員間の相互チェックなどを進め、さらなる質の保証へ向かうことも課題となっている。

GPAの導入、並びに、成績評価の可視化が進むことで、学生の大学への信頼度は上がるが、反面、成績に敏感となり、単位取得が容易な科目や困難な科目を選別するようになることで、本来、自分が学びたい科目について自由に選択しようとする意欲が低下している傾向が一部に見受けられる。

一方、大学では、GPA導入により成績評価について学生への説明責任がより求められるようになり、これにきめ細かく対応するために、教職員が多忙となっている。

岡山大学では、成績評価に関する問題点や課題が各学部から教育システム専門委員会やFD専門委員会のような全学委員会へ提起され、関連組織で検討・課題解決を図る等、それらをスムーズに解決するための学内システムができており、風通しのよい組織となっている。

GPAの算定方法は以下のとおりである。

$$GP = (\text{評点} - 55) / 10 \quad (\text{ただし、} GP < 0.5 \text{ のとき、} GP = 0.0)$$
$$GPA = (\text{履修登録した授業科目の単位数} \times \text{その授業科目の} GP) \text{ の総和} / \text{履修登録した授業科目の単位数の総和}$$

GPの評価方法は、評点（60～100）をもとにGP（0.5～4.5）を算定している。

⁴⁾ 3基幹力を判断する指標としてGPAを活用している
教養力：教養教育科目のGPA、語学力：TOEICの得点、専門力：専門教育科目のGPA

図表 3.5 GP の評価方法

評価	GP	百点満点での目安
A+	4.5～ 3.5	100～90 点
A	3.4～ 2.5	89～80 点
B	2.4～ 1.5	79～70 点
C	1.4～ 0.5	69～60 点
F	0	60 点未満

【学内におけるGPA制度の定着に係る工夫】

岡山大学では、オープンキャンパス時に、成績評価についてGPAを採用していることを周知しており、中学生段階での親子での来訪や中高生の進路指導教員にも好評である。

ルーブリックやGPAによる学修成果の明確化が進路選択をしやすくし、将来展望を描きやすくしていると考えている。

現在、他大学（12大学）とGPAに関する研究会を設置し、制度の改善と普及方法を検討しており、今後も、これらの活動を踏まえて、教職員や学生に効果を発信していくこととしている。

岡山大学の独自性としては、教育のレベルや教員のレベル向上に早くから取り組み、差別化を図ってきたことが挙げられる。

GPA導入に伴うルーブリックの導入で授業に透明度が増し、学生の士気が高まっていることが学生へのアンケート調査から確認できており、好循環を生み出している。

大学の目指すものは教育の質の保証である。岡山大学では様々な施策の中で、GPAの活用を模索している。

大学の年度計画によると、各学部・研究科は、GPA制度の適切な運用を図るとともに、不断に教育の成果・効果及び学生の学修達成度の把握等に努め、また、GPAの充実とより有効な利用法を図り、達成度の把握等に努めている。

教育開発センター（2018年4月より高等教育開発推進センターに組織変更予定）は、学生指導のためにはGPAの学期毎の変化に注目することが大切であり、厳格な成績評価のためには、クラスごとのGP分布の分析が効果的であることを明らかにしている。今後、これらをもとに学内での研修を行い、さらにGPAの普及啓発を進めていこうとしている。

⑤青森公立大学

【GPAを導入した経緯・背景】

青森公立大学では、経営経済学部の単一学部を擁し、「厳格な成績評価」とされているGPA制度を、1993年の開学当初から導入している。

GPA制度導入にあたっては、開学当時、大学の教育理念の一つである「教育に責任を持ち、社会に対して教育の質を保証する。」の実現のため、大学に相応しい成績評価制度について教職員全員で検討した結果、最終的には、米国で導入している制度を基に、大学独自の成績評価制度としてのGPA制度を考案し導入している。

GPA制度導入時には、一部に数値で教育の質を計ることについての反対意見もあったが、GPA制度導入により、学生の学修・努力レベルを計ることができ、学生へのきめ細かな学修指導につなげる事ができることを理解してもらい取組を行った。

教員の理解と賛同なくして、GPA制度の導入は難しいと考えることから、教員間での様々な議論を通じて、GPA制度の本質を正しく認識してもらい、理解を深めてもらうことに注力している。

【GPA活用方法とその効果】

GPAの活用及びその効果としては、以下のような点が挙げられている。

青森公立大学では、通算のGPAが2.0以上であることが必要であり、2年間連続してGPAが2.0未満の学生に対しては、退学勧告が発せられる。

年間の履修単位数を設けているが、成績不振の場合は更に履修単位数を制限している。（例えば、2期連続GPA2.0未満かつ累積GPA1.0未満の場合は、履修単位数の上限は14単位。）

成績不振者をサポートするアドバイザー制度は1年生を対象としており、1年次春学期に開講する「大学基礎演習」の担当教員が担当している。（教員の職位は限定していない。）

その他、学校推薦入学者の学修レベルの推定、成績不振者の学修状況等の分析にも活用している。

○効果

GPAの活用及びその効果としては、以下のような点が挙げられている。

学修・教学の面で、きめ細かな指導ができるようになり、成績不振の学生に対しては、早期のアドバイスや本人が抱える問題・課題等への初期対応が効果的にできている。

特に、卒業要件については、単位数（各学科とも130単位）のみならず、GPA制度を活用することによって、学修の量と質の両面において、一定の水準を保つことができている。

また、学期毎の成績優秀者表彰の対象者の判定、家計が困窮している学生に対する授業料減免の判定にも活用するなど、学生の学修意欲を更に高める効果を生じている。

学生の学力・学修活動とGPAとの相関関係は分析していないが、学生の成績とGPAの順位は、制度の設計上一致していると想定されており、学修面での指導に活用可能である。

【GPA算定方法とその問題・課題】

教職課程に係る科目、段階式での評価に馴染まない科目（インターンシップなど）、留学、他大学との単位互換科目以外の科目については、GPAの算定対象外としている。また、単位を取得できなかった科目はGPA算定の対象としており、履修削除・訂正期限までに履修登録から削除した科目は算定の対象としていない。

GPA算定に対して、学生からのGPA算定に関しての異議申し立てはないが、成績に対する何らかの異議申し立てがあった場合は、成績評価疑義申立制度に従い、科目担当教員が申立内容に基づき調査を行い、その調査結果を学生に回答することとしている。

大学1年生に対して、各学期のオリエンテーションや「大学基礎演習」の科目において、GPA制度の内容（趣旨、算定方法等）について説明している。

GPA制度を教育に生かすためには、科目間での成績評価にバラつきがないことが理想的であり、そのためには、定期試験の難易度に偏り（易し過ぎ、難し過ぎ）がなく、学生の努力が結果に現れ、点数の差別化が図られるような課題、試験を行うことが必要である。

大学では、GPA制度は教育の達成度を測る指標であるが、この制度を活用する運用面での補完的仕組み・制度が完備されて初めて、大学教育全体にGPA制度の強みを発揮できると考えている。

GPAの算定方法は以下のとおりである。

$$\text{GPA} = \frac{\text{全ての科目の取得ポイントの合計}}{\text{履修登録した全ての科目の単位数の合計}}$$

（取得ポイント＝科目の単位数×当該科目で得たグレードポイント）

また、GPの評価方法は、以下のとおりである。

図表 3.6 GP の評価方法

評価	GP	百点満点での目安
A	4.0	80点以上 100点以下
B	3.0	70点以上 80点未満
C	2.0	60点以上 70点未満
D	1.0	50点以上 60点未満
F	0.0	50点未満

【学内におけるGPA制度の定着に係る工夫】

大学院進学を目的とした学生を対象に在学期間短縮制度（早期卒業）を導入しており、累積GPAの指標を要件の一つとしている。

基本的には、学修や教育の達成度を計る指標として活用しているが、成績優秀者表彰や授業料減免の判定、海外派遣研修候補者の選定、成績不振者に対する指導等に活用するなど、学修への意欲を高め、効果的な学修指導を行うために欠かすことのできない制度として大学に定着している。

今後も、開学以来堅持しているGPA制度を維持し、これまでの運用実績と経験をもとに、より良い大学教育に資するための制度を目指し、その時代に適応した改定をその都度実施していくこととしている。

⑥桜美林大学

【GPAを導入した経緯・背景】

GPA制度は、米国の大学などで広く使われている指標であり、留学する際や外資系の企業に就職する際の参考材料ともなる。海外との交流が盛んな桜美林大学は、この制度に着目し、90年代の後半から制度導入の検討を重ねていた。

検討の結果、文学部（現在は廃止）を改組することを機に、学修を効果的に進めること、また、質を高めることを目的として、GPA制度を2000年度から導入することを決定した。2000年度から文学部に適用し、2001年度からは全学部にも適用している。

【GPA活用方法とその効果】

GPAの活用及びその効果としては、以下のような点が挙げられる。

○活用方法

科目履修及び学修活動に対して、学生が卒業まで責任を持って取り組むための支援になるような仕組みづくりを目指しており、履修登録上限単位を定めたキャップ制やアドバイザーによるGPAを用いた履修指導、卒業要件の基準等に活用している。その他、学内の様々な制度と関連させ、奨学金や授業料免除対象者の選定基準、留学派遣の選抜基準、就職等の推薦基準等にも活用している。

○効果

GPA制度を導入し、学生の成績を数値化するだけでは効果は低いと考えており、「アドバイザー制度」と密接に関連させることにより、学修成果を高めることを目指している。

アドバイザー制度は、学生に対して履修登録や主専攻・副専攻の選択、資格取得等に関する相談・指導を行うもので、各学期に最低でも一回は指導や助言を行うこととしている。また、アドバイザーは担当する学生の成績を常にモニターし、必要に応じて指導している。特に、前学期のGPAが2.0未満となった学生に対しては、アドバイザーによる注意と指導を行うことを必須としており、次学期も2.0未満となった場合は保護者を含めた注意と指導を行っている。

こうしたアドバイザー制度により、学生も学修効果を自分自身で把握しながら、能力や意欲にあわせて主体的に履修を行うことができおり、学生の履修態度の向上にもつながっている。

実際に、GPAが2.0未満となった学生の翌学期の成績状況を調査したところ、半数以上の学生が改善したことを確認している。

【GPA算定方法とその問題・課題】

○算出方法

「A」「B」「C」「D」「F」の5段階の成績評価に、次の表のとおりグレードポイント（GP）を付与し、履修した授業科目の単位数にグレードポイントを乗じ、その合計を履修単位数の合計で除して算出している。

図表 3.7 GP の評価方法

評価	GP	評価基準
A	4.0	特に優秀な成績
B	3.0	すぐれた成績
C	2.0	一応その科目の要求を満たす成績
D	1.0	合格と認められる最低の成績
F	0	不合格

○問題・課題

GPA2.0未滿が3学期連続、または通算で4学期となった学生に対し、退学を勧告していたが、2017年度からは「成績不振に伴う警告」に名称を変更している。

成績評価の分布に偏りが見られるため、より厳格化する必要があるのではないか（A、B評価の割合が高い傾向にあるため、成績評価を平準化する）といった点も指摘されており、今後どのように改善するかが課題となっている。

2017年度から、アドバイザーの役割として、履修指導のほかに学生生活支援についても担当するようになっており、教員への負担が大きくなっている。

【学内におけるGPA制度の定着に係る工夫】

各学期の初めに、各教員に「アドバイザーの手引き」を配布し、GPA制度やアドバイザー制度を理解することを求めている。また、新任教員に向けて研修会を開催し、制度の説明を行っている。

⑦同志社女子大学

【GPAを導入した経緯・背景】

同志社女子大学では2002年からGPA導入が検討されていたが、他大学の導入に向けた動向や、留学に当たって先方の大学からのGPAの提出要求、学内における成績の算出方法の検討や、教員の教育方法の組織的改善等の検討を経て、2004年の入学生から適用している。

導入に当たっては、それまで100点法で採点し学生に成績を開示し特に問題を生じていなかったことから、GPAを導入することの必要性に疑問を感じる意見もあった。

また保護者からもGPA制度の導入について、100点法の評価があるのになぜ導入するのかという意見があり、理解が得づらかった。

こうした状況を踏まえて、大学側ではGPA導入の必要性と活用による効果を学内に説明し、かつ、公平で厳格な評価を行うこととし、全体での一定の合意を得ている。

【GPA活用方法とその効果】

GPAの活用及びその効果としては、以下のような点が挙げられる。

○活用方法

平均点の算出に関しては、当初は100点法による方法とGPAの両方を用いることが多かったが、現在ではGPAのみを用いている。

アドバイザー制度は全学部学科で実施している。

同志社女子大学では、以下のような点についてGPAが有効であるとして活用している。

- ・交換留学生の選抜基準
- ・就職等の推薦基準
- ・大学院入学者選抜の基準

○効果

同志社女子大学では、GPAの効果として登録後の履修放棄が激減したことを挙げている。

また、奨学金の選定において活用しており、効率的な選定ができています。

アドバイザーはGPAの値を参考に、学生の履修指導や学修への助言をしている。

【GPA算定方法とその問題・課題】

大学では、入学時に学生に対してGPA制度について説明しているが、十分に理解していない学生が多く、GPA制度が学修活動に直結していない点が問題点として挙げられている。

また、科目間の難易度の差がGPAの値に連動しておらず、優秀な学生を選別するための指標としては困難であることも指摘されている。

なお、卒業要件に参入されない科目や、他大学との単位互換科目で単位修得した科目はGPA算出対象外としている。

不合格科目のGPは0点で計算され、履修放棄科目について不合格科目と同様に0点としている。ただし、不合格科目を再履修して合格した場合、履修した科目のGP算定式の分母には、不合格科目と合格した科目の単位数が2回加算され、分子にも同科目の単位数とGPの積が2回加算されて、履修科目のGPAを算定する。

学生からの成績評価に対する質問制度はあるが、特にGPAを想定したものではなく、一般的な成績評価に関するもので、成績開示日から1週間、文書で受け付け、文書で回答している。

初年度の学生には、履修要項を熟読するよう指導している。

同志社女子大では、GPAは奨学金をはじめ、各種の学内選考に使われるため、学生は最低限の履修登録しか行わない傾向があり、GPAは履修放棄の減少には好ましいが、広い分野の学問に触れる機会を失わせることにつながるのではないかという問題がある。大学としては、学生に対して幅広い履修を行うように声かけをしている。

GPAの算定方法は以下のとおりである。GPの算定では素点を重視している。

$GP = (100 \text{ 点満点の素点} - 55) / 10$ (ただし、0.5未満のとき、0.0)

$GPA = (\text{登録科目の単位数} \times \text{登録科目で得たGP}) \text{ の総和} / \text{当該学期登録科目の単位数の総和}$

図表 3.8 GP の評価方法

評価	GP	評価基準	百点満点での成績
秀	4.5～ 3.5	特に優れた成績を示した。	90～100点
優	3.4～ 2.5	優れた成績を示した。	80～89点
良	2.4～ 1.5	妥当と認められる成績を示した。	70～79点
可	1.4～ 0.5	合格と認められる最低限度の成績を示した。	60～69点
不合格	0.0	合格と認められるに足る成績を示さなかった。	59点以下

【学内におけるGPA制度の定着に係る工夫】

同志社女子大学では、入学直後、学生にGPAの説明を行っている。不合格科目も算定対象に含め、不合格科目のGPは「0」とし、単位を取得しないと不利になるような制度であることなどを説明している。

大学では、学期ごとの成績開示に併せて、学科・学年ごとのGPA分布の棒グラフを学生全員に配布しており、これにより学生は自分のおおまかな成績順位を知ることができている。

また、同様の資料は学期ごとに保護者にも郵送し周知を図っている。

大学では、こうした取組を継続的に行うことにより、学生への周知を徹底したいとしている。

資料編

○大学へのアンケート調査票

